

## 【 シュテップスの愉しみ プログラム・ノート 】

作曲家 H.U.シュテップス(1909～1988)を語る上で忘れてはならないのは、14 才年上で同じドイツ生まれの作曲家 P.ヒンデミット(1895～1963)の存在であろう。1927 年にベルリンの音楽大学教授になってから 1940 年渡米するまでの間が、ちょうどシュテップスが 18 才から 31 才の好奇心旺盛で何事も吸収していったであろう時期にあたり、ここでかなりの影響を受けていることは容易に推測できる。

ヒンデミットは、当時最も熟練した演奏家(ヴィオラ)兼作曲家として広く認められていたが、現在も音楽を志す者のバイブルとなっている多くの理論書「和声学」「作曲の手引き」「音楽家の基礎練習」等の著書により教育者としても多くことを後世に伝えている。

20 世紀初頭、それまでの調性が崩壊し、シェーンベルク、ベルクらの十二音技法による試みが注目される中、それを参考にしつつも疑問を抱き、学生の頃から古い様式を大切にしたブラームスに影響を受けて新バロック様式を完成した。その後、十二音、全音階を用いながらも調性を生かした新古典主義へと傾倒していく。民謡を素材にしたものやジャズやナイトクラブの音楽を取り入れたりと作風の豊かさは当時から伝説となっていた。オリジナル楽器を用いた中世・ルネッサンスの演奏にも興味を持ち、渡米後企画された古楽コンサート・シリーズは、自らの演奏本能のはけ口となっていたようである。

ベルリンの音楽大学教授となった同時期にノイケルン青少年音楽学校での授業も担当し、熱心な学生に接して多くのアマチュアのための音楽を作曲している。リコーダーのための作品は「トリオ(S.A.T.)」1 曲のみであるが、ここでリコーダーとの接点があったと考えられる。後にこのノイケルン青少年音楽学校では、R.バルテルらによりリコーダー合奏の授業が行われ、1950 年代には E.ポレツキー、K.H.ヴィッシャーらシュテップスと同世代のベルリン在住の作曲家達によりリコーダー・オーケストラ編成の楽譜が出版され、現在でもリコーダー合奏団の重要なレパートリーとなっている。

このようにひとりの人間として作曲家ヒンデミットを見ていくと、シュテップスとの多くの共通点、接点が見られ興味深い。

さて、今夜の主役はシュテップスである。1940 年(ヒンデミット渡米)から 75 年まで、ウィーン市立音楽学校にて教鞭をとる(リコーダー、チェンバロ、近代音楽理論)ことになるが、この間に膨大な数のリコーダー作品を残している。63 年には出版社「ドブリンガー」にて自らの作品を集めた“Flautario”を立ち上げ編集にあたった。その割りには作曲家としての情報は少なく、56 年にプロフェッサーの称号が授与されたこと、61 年にテオドル・ケルナー賞を受賞したことくらいしか出版社のプロフィールには載せられていない。

Flautario シリーズの中で本人が述べているように、リコーダーという楽器を音楽史的な好奇心を満たす道具としてでなく、演奏者のとどまるところを知らない意欲を自由に表現できるものとして高い理念を持って接していた。現在でも演奏家を志すものによって使わ

れている教則本「斬新的毎日の練習」(ユニヴァーサル版)は、いち早くこの楽器の魅力を認め、その可能性を十分に引き出そうとした名著である。Flautario シリーズでは鍵盤楽器との独奏曲から6声部の合奏曲まで様々な編成の作品が出版されている。

作風としては、十二音的、全音階的な旋律、非和声音アッポジャトゥーラを多用した(前出のヒンデミットとかぶる)近現代的なサウンドではあるが、ほとんどが民謡など美しい旋律を素材にした変奏曲で、形式、調性などは、はっきりしている。しかし、楽譜上、変拍子になっている部分でも拍子と関係のない旋律上の字余りであったり、逆に単一拍子で書かれていても多くの変拍子、複合拍子を含んでいたりと予測不能な部分も多く、この意外性がシュテップスの作品の魅力となっていると言えよう。

彼の門下には、古楽器合奏団「クレマンシック・コンソート」を率いた R.クレマンシック、「ウィーン・ブロックフレーテ・アンサンブル」を率いた H.M.クナイスらがいる。

『コーリック・クインテット』(1963年)は、「合唱的な五重奏曲」と訳されるが、編成は1. フルート/オーボエ(ソプラノ) 2. ヴァイオリン(アルト) 3. クラリネット(アルト) 4. ヴィオラ(テナー) 5. ファゴット/チェロ(バス)となっており、他の曲同様、常にリコーダーのオクターブ下の音域を重ねることを想定していたと考えられる。合唱風の重厚な響きで始まり、緊張感を伴った3つの楽章が続く。終楽章のジグ風舞曲では、9/8と6/8が交差し、より緊張感を盛り上げている。

『ハ調のパーティータ』(1963年)は、数節から成る中世フランスの詩歌「それはマルスの神」を用いた変奏曲である。元々はあるバレーの一部で、16・17世紀には上流社会において格別の人気を博し、J.v.エイク、J.P.スヴェーリンクら当時の多くの作曲家を刺激し、珠玉の作品が生まれた。この中で作曲家自ら楽器編成に触れ「リコーダー四重奏と弦楽四重奏(オクターブ下)と一緒に演奏することにより、オルガンのオクターブ・ミックスのようにほぼフルオーケストラ並の豊かな響きを創り出すことができるであろう。」と述べている。現在では一般に普及してきたグロス・バス、コントラ・バスは、作曲された当時にはまだ手に入り難く、このような手段により理想的な響きを得るための工夫がされていた。現在ではリコーダーのみでオクターブ下の重ねが可能になり、最初からこの重ねが想定されたリコーダー・オーケストラ編成の作品が生まれるようになった。

『トリオ』(1972年)は、以前から交流のあったアメリカのロスアンジェルス在住のリコーダー演奏家のために作曲されたもので、A.A.T.編成でかなり高度な演奏技術を要する。高音域で2オクターブ上のA $\flat$ を用いる等、リコーダーの特性を熟知し限界に挑んだ彼ならではの作品である。

『変ロ調のパーティータ～眼下に広がるあの森にゃ～』（1958年）は、ドイツ・シュレー  
ジェン地方(現ポーランド領)の民謡に基づいた変奏曲である。旋律は19世紀前半のもので  
あるが、現在ドイツではあまり一般的ではないようである。しかし歌詞は「ある兵士の愛  
の歌」とあり、かなり古い時代から伝わっており、1582年のフランクフルト歌曲集に載っ  
ている。

眼下に広がるあの森にゃ 見事な挽き臼ありまして 毎朝、金銀を挽いてくれる  
森の牡鹿は何を口に？ それは綺麗な黄金の指輪  
もしも私が指輪でも 作れる金を持ってたら 可愛い彼女に贈るのに  
彼女は何をくれるだろ？ 真珠のリースをくれるかな？  
見てごらん？ あそこにいるのは優しい兵士 私を思い出してくれ

5つの楽章から成り、一曲目の終結部にて主題のモチーフが提示されるが、全フレーズは  
3曲目の「リート」で初めて聴くことができる。

『小さなデュエット』（1950年 出版）は、シリーズで出された全12曲からなるデュエッ  
ト集で、今回の中では一番古いものである。演奏に際しては、感覚的な部分の理解やリズ  
ムに関して大変難しく、演奏者に対して前向きな挑戦を求めた作品と言っても過言ではな  
い。作曲者自身「これらのデュエットは、一般的には過去の楽器と考えられているリコー  
ダーで、現代の音楽を奏でたい演奏家のために意図して作ったもので、限界と思われてい  
る壁をやぶり音楽表現、色調の読解、そして何よりリズムの面においていくつかの要求を  
している。」と述べている。作曲者初期の秀作と言えよう。

『故郷の農園で』（1973年 出版）は、ボヘミア民謡に基づくもので、3声部(A.A.T.)で作  
曲されているが、今回はB.B.GB.を基本編成とし、そこに部分的にA.A.が加わるという方  
法をとる。旋律自体は1オクターブ内のシンプルなものであるが、調性を損なわないなが  
らも非和声音を駆使した独特の歌いまわしにより、シュテップス・ワールドに引き込まれ  
て行く。下声部では4音による下降型のオスティナート、リズムックな2音のオスティナ  
ート等、随所に遊び心が伺われる。とりわけ主題提示直後の7/8拍子(アッという間に終  
わる)が楽しい。主題にはやはり歌詞が付けられている。歌い手がいる場合は一緒に演奏し  
たのであろう。

故郷にある僕らの農園で 聞こえてくるのはガチョウの声  
雄鶏の声も聞こえてくるよ  
お前は僕のあこがれの人 愛しい人よ  
片時もあなたのことを忘れない そう、忘れはしないさ

『インヴェンションズ～秋の歌～』(1981年)は、シュテップスがウィーン市立音楽学校の教授職を退いてからの作品で、今回の中では一番新しいものである。冒頭で3本のリコーダーとギターのためにはっきり謳っているが、ギターパートはほんの数小節を除いては単旋律で書かれており、多くの作品同様、他の旋律楽器での演奏も念頭にあったと考えられる。特に低声部の B.リコーダーにギターを重ねる記述は多い。タンギングによるリズムが不明瞭になりがちな低音域をギターでカバーすることは、音楽的にはかなりの効果をもたらすことになる。7曲から成り、最後は歌と対旋律が加わり主題再現となる。

世界中どこにでも どんな時代でも 幸せのあるところには必ず歌がある

そのことを心に留めて 忘れないで

幸せと歌 決してどちらか一つだけがあなたの家の扉をたたくことはないのだと

それを忘れないで

たとえどんなに時間がかかっても

幸せと歌 どちらかが必ずもう片方を育んでくれる

だから幸せと歌 一緒にあなたの家に入れてあげて

世界中どこでも どんな時代でも 幸せと歌 いつも一緒 それを心に留めておいて

『サラトガ組曲』(1965年)は、ニューヨーク北部のサラトガ・スプリングスで開かれた第一回国際リコーダー講習会のために作曲されたもので、3声部で書かれている。多くの参加者による高度に発展した合奏を想定しており、作曲者は「中級程度の難しさ?なので多い人数で演奏できる」と書いている。アパラチア山脈と湖の美しい風景を想像しながら書かれた作品で、特徴的なところは、以前に耳にした先住民族インディオの即興演奏を記録した部分である(1曲目に現れる)。現地では古くからインディオの間でリコーダーと同じ発音原理を持つ“インディアン・フルート”と呼ばれる笛が使われていた。現在では即興演奏が一般的であるが、かつては各部族に伝わる旋律を演奏していたに違いない。多分この音色が頭に残ったのであろう。今回はこの“インディアン・フルート”を意識して、バロック・タイプのリコーダーでなく、内径が少し広く低音域の響きが充実しているガナッシ・タイプのリコーダーを使って演奏される。ニューヨークを意識してかジャズ風のモチーフが一瞬登場したり、終楽章ではインディアン・サマー(北アメリカで晩秋から冬にかけての穏やかで暖かい日)が5音階で表現されている。

『7つの笛の踊り』(1954年 出版)は、作曲年代から推測すると、まだ低音楽器が普及する前であったと考えられ、そのためか4声部ではあるが B.リコーダーを使わない S.A.A.T.という編成で書かれている(推測の域を出ないが)。我が国でも B.リコーダーの普及率を考え最低声部を T.リコーダーが担当するアレンジが多くみられる。曲名通り7種類のヨーロッパの笛を題材にしたもので、特徴がよく表れている。

- ティビア …… ローマ人が用いた脛の骨製の笛で、古代から亡き人の骨で作った笛を吹くと、またその人に会えると信じられていた。
- チャカン …… ステッキ型のリコーダーと同じ発音の笛で、今日もなおユーゴスラヴィア、ハンガリーなどで演奏されている。6つの指孔を持ち、この笛のための独奏曲も作曲されている。
- シャルマイ …… オーボエの古称(ショーム)のことで、2枚の葦のリードを持ちシャーナイ、チャルメラとシルクロードを伝わる過程で呼称が変化していった。クラリネットの先祖と思われるような1枚リードのものも残っている。
- ドイツフレーテ …… 横に構えて演奏するリコーダーと同じ発音原理を持つ笛のドイツ語の古称。
- シュリンクス …… 古代の牧笛の古称で、長さの違うパイプを横に並べて演奏される。ハンガリーではパンパイプ、南米ではシクーリと呼ばれている。
- テイバーパイプ …… 片手で奏する3つの指孔の笛であるが、オクターブ以上の音域を持つ。多くの場合、奏者自らがもう片方の手で太鼓を叩いて伴奏をする。冒頭からこの太鼓のリズムが現れる。
- サンブーカ …… **Sambusas** とはラテン語でトネリコの木のことで、笛の詳しい情報は無いが、強いお酒テキーラにこの名が付けられたものがある。曲調からにぎやかな音の笛であろう。

我が国では、1970年代からリコーダー合奏が盛んになってきたが、この曲が最も頻繁に取り上げられており、多くの合奏団により思い思いの編成で演奏されてきた。シュテップスの代表曲と言ってよい。

『ロンデッリ』(1962年)は、“中世の速い曲”という意味を持つ組曲で、5つの舞曲で構成されている。めまぐるしく変わる拍子感が特徴であるが、作曲者自身述べているように「それぞれの舞曲は打楽器を加えやすいように拍子を変えずに」書かれてる。編成もS.S.A.A.(T.)という非常に高い音域で密集しており、常に緊張感に満ちあふれた不協和音が印象的であるが、最終的には調性感のはっきりした響きに落ち着き、聴く者を安心させる。他の曲同様オクターブ下の重ねが弦楽器などで指定されている。今回は低声部をA.(T.)からB.リコーダーに変更し、ギターを重ねて演奏される。

今回取り上げられた作品は、彼の膨大な作品群の中のほんの一部に過ぎないが、比較的演奏しやすいものばかりである。近代現代において最もリコーダーという楽器を愛し、熟知し、一生を捧げた作曲家H.U.シュテップスにこの先より多くのスポットが当たることを期待している。